

特集 比較研究の地平

ヨーロツパのメルヒェン研究と柳田國男の昔話観

—ボルテ／ポリファカ編『KHM注釈』の書き込み調査を中心に—

横山 ゆか

一 はじめに

…独逸ではグリム兄弟が国内現存の民間説話をあつめ、同時にその研究に指をそめてから、これが因縁となつてこの国の説話学は大いに栄えた。二人の歿後もその門流の手「ヨハネス・ボルテとゲオルク・ポリファカ」によつて、比較考証の書『グリム兄弟の子どもと家庭のメルヒェン集注釈』は年増しに大きくなった。私の読んでいるのは戦前にできた第二版三巻であるが、やがて大増補の新版が出るという話も聴いているし、昨年はまたその第四巻として、同じボルテ、ポリファカ二氏の世界民間説話史も公刊せられている。勿論グリム以後に於ても、露西亞のアファナシエフとか、蘇格蘭のキャンベルとか、一々列挙し得られないほど、雄大なる説話採集が幾つも現れているが、単にその本国民に讃嘆しまた感謝せられているのは小さな効果で、これが最も大きな輝きを世に

放つたのは、やはり一応この独逸の中心地へ持て来てから後であつた。即ち所謂K・H・Mの事業は、この方面に於てまさしく世界に君臨しているのである。¹⁾

近年、高木昌史氏の共同研究²⁾によつて、柳田文庫の洋書文献の調査が行なわれた。高木氏の調査によると、グリム兄弟の『子どもと家庭のメルヒェン集』(以下、KHMと略記)やヨハネス・ボルテ／ゲオルク・ポリファカ編『グリム兄弟の子どもと家庭のメルヒェン集注釈』(以下、BPと略記)に柳田による書き込みが多数見られるという。右の文は、柳田國男の『郷土生活の研究法』から引用したもので、高木氏によると戦前に出来た第二版三巻とはBPの第一巻から第三巻(一九一三年(一九一八年刊行)を指している。³⁾柳田が昔話研究発達の中心地をドイツとみなし、グリム兄弟の功績を讃嘆している右の引用文は、彼がKHMを昔話採集および比較研究の手本にしていたことを窺わせる。

ところで、柳田が昔話研究を本格的に開始していく上で、KHMをどのように読み、そして自身の学問にどのように活かしていたのか、柳田文庫所蔵のKHMに見られる柳田の書き込みを調査し、その読書過程を拙稿で述べていった。本稿は、その続編ともなる、柳田文庫所蔵のドイツ語文献の中でも、書き込みの多いBP第四卷第一章に見られる書き込み調査および昔話の起源をめぐる当時の西欧の研究者たちの諸説を柳田のそれと比較対照することによって柳田の昔話観をその中に位置づけようと試みたものである。書き込み調査と考察の結果、柳田の昔話観の背後にはグリム兄弟やBPの影響がみられた。BP、そして当時の西欧諸国の昔話研究から柳田は何を得たのか、その足跡を辿ることにする。

二 柳田文庫所蔵のボルテ／ポリフカ編『グリム兄弟の子どもと家庭のメルヒェン集注釈』

柳田文庫に収められているBPのテキストは以下の全五冊である。

Grimm, Jacob und Wilhelm: Anmerkungen zu den Kinder- und Hausmärchen der Brüder Grimm. Neu bearb. von Johannes Bolte und Georg Polivka. Bd. 1 - 5. Leipzig, Dieterich'sche, (Bd.1: 1913, Bd.2: 1915, Bd.3: 1918, Bd.4: 1930, Bd.5: 1932.)
定本の年譜によると柳田は第一巻から三巻を滞欧中の

一九二一年にドイツで購入し、日本に送っている。出版年から考えると、第四巻、第五巻は帰国後購入したことになる。なお全巻とも読了自記は残されていない。

第一巻から第三巻は、KHM(一八五六年版)第三巻に収められたグリム兄弟の注釈を増補したもので、KHMの個々の番号に類話や重要なモチーフの特徴を紹介している。さらに、ヨーロッパだけでなくアジア、アフリカなどを含めた豊富な類話一覧を掲げて、事項説明、および一般的な解釈をほどこしている。第四巻ではメルヒェンの歴史や古代、中世、近世の文学作品に現れているメルヒェンおよびそのモチーフが紹介されており、第五巻では各国のメルヒェン収集状況やメルヒェンの成立と伝播に関する諸理論が紹介されている。⁵⁾全五巻の中でも特に四巻目に書き込みが多く、第八章「グリム兄弟の収集」以外の章では、ほとんどの頁に下線が見られる。そこで、まず初めにBP第四卷第一章「メルヒェンの名称と特徴」における柳田の書き込み箇所を手がかりに、柳田がBPをどのように読み、自身の学問に取り入れたのか具体的に検討していく。

三 柳田國男「昔話採集者の為」に見られるBPの影響

ここでは、柳田による注記および○や▽がほどこされている箇所を項目ごとに分けて全てではないが以下に示す。なお、〈〉内の語句はBPの本文中に見られる柳田による書き込みを表し、

本文中の傍線は柳田による下線ないし欄外の傍線を表している。「?」は判読できなかった箇所を、本文の引用箇所の意味内容を明確にするために、「」で適宜補足を加えた。また、() 内の数はBP第四巻の頁数を表す。

・発端句、中句、結末句

ボルテ／ポリフカは「昔々あるところに」や「彼らはまだ死んでいなければ今もまだ生きている」といったメルヒエンの形式句に大きな関心を抱いていたようで、BP第四巻第一章には世界中のメルヒエンの発端句や中句、結末句の例が多数紹介されている(一三―三六頁)。全体を通してても形式句に関する箇所に下線や書き込みが多く、柳田もまた昔話の形式に大きな関心を寄せていたことがわかる。以下、メルヒエンの形式句に関する柳田の書き込み箇所を引用する。

メルヒエンの導入部および結末部では、十六世紀、すなわち中世から証言されている同じような決まり文句 [Fomne] が度々繰り返されている。すでにアリストファネスの作品には「昔々ある所に」という広く普及した発端が証言されている。デンマーク語：Det var engang. 英語：Once upon a time. フランス語：Il y avait une fois. …… 中国語では Pien pa = So war es. (一三一―一四頁)

「世界が始まった最初の日に」(Folklore Journal 6, 17: アイヌ) (一四頁)

イギリスのあるメルヒエンでは年代を確定することを[✓]ふざけながら拒んでいる。「昔々ある所に、それはとってもいい時代だったのだけど、でも私の時代ではなく、あなたの時代でもなく…」(一五頁)

ナツソーでは慎み深く韻を踏んだ発端句となっている。(一六頁)

〈中詞〉物語の流れの中で話し手はしばしば「聞き手」の注意がそれないように、耳を傾けてくれている聞き手に話しかける「彼らが貧しい子供たちを思つてどんなに泣いたことか考えてみてちょうだい。」(Gr.5)あるいは、金のロバが不思議な力を見せる時、「おまえさんもそこにいたら良かったのにつて顔してるわね」(Gr.36) (二〇頁)

彼「話し手」は、冬にイチゴを探しに行かされた少女が雪を掃つた時に、聞き手に尋ねる「少女が見つけたのは何だと思ろ?」(Gr.13) (二〇頁)

✓ そうした質問は時折、橋渡しとなる決まり文句

「Übergangsfornel」としてもメルヒエンの別の部分で使われている。(二二頁)

〈例ハ……あるは Blade 3,60 のガスコニーのメルヒエンでは、「眠りなさい、善良な人々よ、私が狐ルナールと狼と大きなライオンのお話をしている間に、眠りなさい。」(二二頁)

これは中世の語り手の技巧から継承したものである。というのも、古代の叙事詩人はそういった「話の」転換を両方の登場人物の簡潔な対照によって表わすか、あるいは、「しかし」とか「その間」といった言葉だけで新しいエピソードを導入するかのどちらかで、他方、色々な言い回しや真実であるという言明、要求、約束によって、聞き手とのつながりを真面目にとっていることを知っている十二世紀の同胞は大きく合図することで、新たな出来事に聴き手の注意を引こうとする。(二二頁)

決まり文句は散文の物語においても伝えられている。(二三頁)

○ ペッチュが示唆に富んだ本にまとめた結末句は、主人公の遙か先の運命を引き合いに出すか、あるいは語り手とその信憑性に目を向けたものか、メルヒエンが終わったということを知らせるかのどれかである。(二四頁)

自然解釈のメルヒエン「起源説話」の結末では、動物、あるいは植物の外見の変化が今なお続いているという記述がしばしば見られる。例「カレイの口は曲がったままで。」(Gr.172) (二五頁)

まれにメルヒエンは、寓話に見られるような教訓で終わっていることがある。例「わかったかい、そうして世界は回っている」(Gr.2)。「急がば回れ」。(二五頁)

〈コレデオシマヒ〉「それから先のことについては私は何も聞いてない」(三〇頁)

「これでおしま」[Aus]という結末句は、押韻で粉飾されるのもまれではな「Snipp Snapp Snut」・・・ Et eric a crac …。(三〇―三二頁)

〈鶏ノ声ヲナス「トリガナク」〉独特なのは、時折、話し手が夜明けの薄明を知らせ、メルヒエンの世界の夢から現実へと呼び戻す鶏の声で話を終わらせることである「そこで雄鶏が鳴いた。キツケリツキ。メルヘンはこれでおしまい。キツケリツキ」(Gr.122)；フランス語「でもある晩…雄鶏が鳴いている、朝が来た、私の話はこれでおしまい。」「雄鶏が鳴いた、

みなさん、朝が来た。」(三三頁)

〈コレデオシマヒ〉の書き込み以外にも〈有ツトサ〉や〈草木コトトヒシトキ〉といった書き込みもあり、柳田は日本の昔話の形式句を対比させながらB Pを読んでいたことがわかる。日本の「昔々あるところに」に該当する各国のメルヒェンの発端句が紹介されている箇所では中国語の箇所には下線が引かれ、アイヌ、さらにはイギリスの機知に富んだ発端句、ナッソーには押韻形式の発端句があるという箇所にも下線がほどこされている。K H Mにおける中句が紹介されている箇所では、K H M番号に下線が引かれており、メルヒェンを語る際、語り手が話の途中で聞き手に語りかけることよって注意を引くことに注目している。結末句に関する部分では、教訓で終わる話や、韻を踏んで終わるものがあることにも関心を寄せている。なお、柳田文庫所蔵のK H M本文中にも発端句と結末句の箇所に下線が多数見られ、昔話の形式句に対する柳田の関心の高さが窺われる。

ところで柳田はB P第四巻が刊行された翌年(一九三一年)四月に、後に『昔話覚書』に収録される「昔話採集者の為」⁽⁷⁾を雑誌「旅と伝説」で発表している。この論文で柳田は、昔話採集の便宜を図るために「昔話」という語に明確な意味を持たせようとして定義づけを試みている。その際、柳田は形式的な観点から発端句と結末句に注目し、昔話は必ず冒頭に昔々という一句をそなえて語っている、「話はこれを以て終わる」といっ

た意味を持つ結末句を有すると定義している。さらに柳田は、日本には少ないが、昔話には合いの手、すなわち中詞(中句)がみられることも指摘している。昔話の形式句に着目した柳田は、後に日本における発端句と結末句の地方的変化の特色、傾向を明らかにしようと論考「昔話の発端と結び」(昭和十七年三月)を著していることも注目に値する。

・話の信憑性

発端句やジャンル論にも関連するが、ボルテ／ポリフカはメルヒェンの冒頭部で話の信憑性に関して語り手がその立場を表明する事例を紹介している。

〈有ツトサ〉 信憑性という問題に対する立場を最初から明らかにしている語り手たちもいる。というのも、人々はたいてい詩人の創造的活動をそれほど尊重してはおらず、むしろ詩人と嘘つきを同じものとみなしているからである。起こったこととして報告されることは現実にもまた生じたということの人々は要求するので、そのような大人の聞き手を前にしたメルヒェンの語り手はしばしば困った状況に陥る。「この話は嘘のように思われるけど、でも本当のことなんですよ」とグリムの一七七番のメルヒェンは始まる。あるロシア人は、祖母から話を聞いた、と自分の祖母を引き合い出している。事実在即して感じる

バスコ人は前述のような事柄を典型的なものともなしている。「世界によくあるように、一人の男と一人の女がそこに生きていた。」他方、ブルターニュ人は疑う者に「信じるか信じないかを」選ばせる。「お聞き、お前達はそれがわかるだろう。信じなければ信じ、信じなければ信じなくても良い。自分で確かめるよりは信じたほうが良い。」(一七頁)

〈草木コトトヒシトキ〉 ロシア人は違う方法で物語の現実性に対する批判的な疑念をなだめようとする。「かつては今のようではなかった。かつてはこの世の中に色々な不思議が起こっていた。そしてまた、世界そのものも今とは違うものだった。私たちの時代にはもはや何もない。」(一八頁)

話が本当のことだと知らせるのに、証人を引き合いに出すことがある。例…「私のお師匠さんがそう語ったのだよ。」：スウェーデン語「私が嘘を言っているのなら、それを私に話した人が嘘をついているのだ。」(二六頁)

柳田は右の箇所を読む際、「あったさうだ」という伝聞の意味が含まれる(有ツタトサ)や「草木が喋っていた時」という始源的混沌の表現でもある「草木言語(ことと)ひし時」(『常陸国風土記』)といった日本の昔話にも該当する句を念頭に入れていたことが書き込みからわかる。話の信憑性は伝説と昔話を区

別化する基準の一つとなっており、柳田も話の信憑性に注目して昔話および伝説を定義している。これについて以下の項目で詳しく取り上げる。

・昔話と伝説―隣接するジャンル

BP 第四巻第一章の後半部では、昔話のジャンルに関する問題が取り上げられており、以下の箇所に書き込みが見られる。

メルヒェンは構造と様式という重要な特異性という点で、伝説やバラードといった民衆文学の他のジャンルと共通している。その重要な特異性はアクセル・オルリクによって叙事的法則と名づけられた。例えば、三数字の繰り返しや後部優先、すなわち三番目の弟の強調、あるいは最初の二人の兄を越えた三番目の弟の試みの強調というように、メルヒェンと伝説の主な違いは本当の世界との関わり方にその本質がある。*(二六頁)〔三番目の弟の強調〕の箇所に(甲賀三郎)の書き込み)

* 注 F. Panzer, Märchen, Sage und Dichtung 1905 S.18. F. Ranke, Die dt. Volksagen 1910 S.Xf. J. Folkers, Zur Stilkritik der dt. Volkssage (Kiel 1910). Orlík, Grundsatzinger 1921 p.33. W. Aly, Herodot 1921 S.9. Rutgers, Märchen und Sage (Grünigen 1923)

伝説が現実性を与えることを要求し、聞き手に信じることを求める一方で、聞き手たちをただもてなそうとするメルヒェンは、この世の出来事の内容には関心がない。この多様性から見た別のものが生じている。伝説はキツタのつる同様、歴史の出来事と人物につながっているか、あるいは周辺地域の特定の対象物、山や湖や木、建物につながっている。メルヒェンは時間的、場所的に結び付けられておらず、それどころかほとんどの場合、登場人物の具体的な名称を放棄している。(三二六頁)

また、ヴィルヘルム・グリムによる一八一九年KHM序文の引用部に以下の傍線がみられる。

歴史的伝説というものはほとんどの場合、何か変わったものや驚くべきもの、超自然のものでさえ、まさに重大なこととして、日常的なものやよく知られたもの、現在のものと同様につなぎ合わせ、そのため、伝説はしばしばそつげなく、鋭く、そして奇妙に思われる。メルヒェンはしかしながら世界から離れて、囲われて、邪魔になつていない場所にあり、メルヒェンはその場所を越えて、世界をさらにのぞき見ることはない。それゆえに、メルヒェンは名前も場所も特定の故郷も知らず、それは何か祖国に共通しているものなのである。(一八一九年KHM序文) 同様のことをヤーコプ・グリムは一八四四年の

ドイツ神話学S.XIVで述べている。それに合致しているのは、ホーエンフルト(H82)やコイターベルク(96)のように語り手の近隣の地名がごくたまに見られるということである。一方、ブレーメン(27)やシュトロームベルク(93)、東ポーンメルン(152)、スイス(33)、紅海(88)、東インド(137)は明らかに、ただどこかの遠い見知らぬ地方を意味しているにすぎないのだそうだ。(三七頁)

しかしながら、かなり昔から密接に関連しているジャンルという点で、時として、この二つのジャンル「メルヒェンと笑話」に境界線を引くのは難しい。なぜなら、笑話的特徴というものは語り手の気分、そして聞き手のグループの状態に応じて同じ題材でも強く、あるいは弱く現われうるからである。(二八頁)

ここでボルテ／ポリフカはグリムやアクセル・オルリクのメルヒェンの法則、定義を引用し、伝説は聞き手に信じることを要求するが、メルヒェンは娯楽のために話されるので信じることを要求せず、また、伝説は特定の人物や事物と結びつくが、メルヒェンは特定の場所や時間との結びつきがないと、メルヒェンおよび伝説の概念を規定している。先に述べた論考「昔話採集者の為」において柳田は形式的な観点以外にもボルテ／ポリフカと同様、物語の信憑性と言う点で伝説との差別化を次の

ように行なっている。すなわち、話法の特徴として「あったそうな」というような「私はそう聞いている」という意味の語が昔話にはあり、昔話は最初から説く人、聴く人は信じようとしていない、周遊、流伝の力が強い、技術、文芸作品で、一方、伝説は常に信じられ、又、信じようとしていたもので、土地に定着し、それは記憶、素材という事実である。

先に述べた昔話の形式的な観点からの概念規定および日本における発端句と結末句に関する研究と同様、柳田の昔話の定義や研究にはB Pで述べられていることと重なる点が多く、B Pの刊行年および柳田の論文「昔話採集者の為」の発表年を鑑みても、日本の昔話研究を構築し、発展させていく上でB Pを参考していたと考えられる。

・語りの場と語り手

B Pでは、古代や中世、近世においてメルヒエンを語ることを生業としていた者およびメルヒエンを語る旅職人についての以下の事例が挙げられている。

〈話ノ者〉…古典古代の時代のアレタロゴス [Aretalagos : ラテン語でストーリーテラーの意] やファブプレーター [fabulator : ラテン語に由来し、同じくストーリーテラーの意] あるいはミムス [Mimus : 古代ギリシア・ローマで市場

や私邸で演じられた口上、軽業、声色、物まねなどの芸の総称] のようにメルヒエンを語ることを職業として、生計を立てていた時代があった……。 (六頁)

○ イヴァン雷帝はこうした目的のために三人の目の見えな
い男たちを雇った。十七世紀にはそのようなメルヒエンの語
り手たち [bachaj, skazitaj, skazočnik] はツァーリであった
ミハイルやアレクセイの宮廷に置かれ、十八世紀には女帝エ
リザベスや多くの貴族達の下に置かれていた。そのような
者たちはしばしば農奴や子どもの世話をする者たちであっ
たが、しかし、方々を旅する語り手、すなわちボヤレン
[Bojaren : ロシアの貴族の一種] によって宮廷に至った中世
の同胞 [skomoroch] の継承者もいた。〈同胞〉 (七頁)

田舎の日雇い (オーストリアで言われるような手仕事) である
方々を旅する仕立屋あるいは靴職人というのは、しばしば有益
な仕事と並んで下男下女に彼らの持つ伝説や物語の蓄えからい
くらか提供する。宿のない物を乞いたちもまたしばしばこうした
方法でもてなしの良い主人に感謝の意を表わす。 (九頁)

彼女「イギリスの作家ディケンズの祖母」は心打つ面白い物
語を感動的に表現し、登場人物の様々な性格にしたがつて身
振り手振りでもって表現するという本当に素晴らしい才能を

持ち合わせていた。女性、あるいは男性がメルヒエンという宝のより良き管理者であるかどうかは収集家たちがその経験にしたがつて様々に答えるところの問題である。……ミューンホフやシュティール・テンプルはたいがい子供の中から「話を」得ていたが、ヴィサーや他の者たちにとっては高齡であることがより豊かな「話の」源泉であるということが明らかになった。(九一〇頁)

ところで柳田は『口承文芸史考』において、目の見えない女性や座頭など、語りごとを職とする者が日本にも多いことを指摘している。⁸⁾柳田は、ヨーロッパにおいて語りを職としている者の存在をBPから知り、日本におけるそうした語り手に関する研究を行っていった。さらに柳田はメルヒエンが語られる時や場、聞き手と語り手の掛け合いにも関心を抱いていたようで、以下の引用部に書き込みがみられる。

〈話ハ訳ノモノ〉 それどころか、あるアイルランド人の語り部は物語 [Geschichte] を昼間に語るのを拒んだ。なぜならそのことが不幸をもたらすからだ…同様のことをニューギニアのバストスの人々とズルカの人々は信じている。(五頁)

〈御伽〉 夜にメルヒエンを語らせた最初の人はアレクサンダー大王であった。そのことをからかう人たちもいたが、し

かし彼はメルヒエンを聞いて楽しむために語らせていたわけではなく、眠らずにいるため、用心し続けるためであった。(七頁)

カイ島「インドネシア東部の諸島」ではお通夜の時、一人の女性が頭を膝の上に置いてから次のように言う。「私は何かの夢を見た。その話「夢」はこうだ。(一六頁)

✓ 同様に、ダホメの黒人たちの間では語り手は次のように呼びかける…「アロー」[Alo]・メルヒエン」、そして聞き手はこう返す「アロー」(一六頁)

○ インド人は *hum* という声によって関心を示す。(一七頁)

しばしばロシア、ベラルーシそしてウクライナの語り手は聞き手の期待を膨らませるために、面白い、あるいは下品な前メルヒエン [Vornarochen (priskazka)] を前に述べる。(一九頁)

〈オ次ノ番〉 しばしば聞き手の一人が別のメルヒエンを語って場をにぎわすといった要求が続くことがある。(三三頁)

アレクサンダー大王が眠らないためにメルヒエンを語らせたという箇所(〈御伽〉)の書き込みが見られるが、御伽のトギガ

喪家に通夜すること、睡を忍び起き明かすことを意味していたこと、陣営生活の夜にトギを語っていた、と日本における昔話の語りの場に関することが『口承文芸史考』で言及されている。⁹⁾

・昔話の分類

ポルテ／ポリファカはメルヒエンを動物メルヒエン、本来のメルヒエン（魔法メルヒエン）、笑話の三つのグループに分けているアンティ・アールネの分類が最良だと述べており、この箇所は〈三ツノ境ノモノアリ〉の書き込み、および「三つのグループ」、「小説的メルヒエン」に下線、「三つのグループ」の部分にはさらに✓がみられる（二九頁）。

柳田文庫には右の引用箇所で言及されているアールネ／トンブソンの『昔話の類型』（以下、ATと略記）が所蔵されており、柳田による書き込みが多数みられる。¹⁰⁾紙面の都合上、深く立ち入ることはできないが、柳田はアールネの三分類法に対し、「昔話の成長の過程を、個々の民族に就いて充分に、調べてみるだけの余裕がなかつた為だらうとも思ふ¹¹⁾」と否定的な態度をとっており、柳田はまずは一国における分類を行うことを提唱し、『日本昔話名彙』で昔話を発生論的な観点から本格昔話と派生昔話の二つに分類している。

以上、BP第四巻第一章「メルヒエンの名称と特徴」における柳田の書き込みを手がかりに、柳田の昔話研究に与えたBP

の影響について検討してきた。柳田は昔話の比較研究の資料となるBP第一巻から第三巻をジュネーヴで購入し、BP第四巻が刊行された一九三〇年以降、後に『桃太郎の誕生』や『昔話と文学』、『口承文芸史考』に収録される論文を次々に発表している。書き込み調査の結果からもわかるように、昔話の概念を規定する際、柳田はBPから特に大きな影響を受けていたと考えられる。ところで『桃太郎の誕生』をみてもわかるように、柳田は昔話の起源および成長発達の過程を追究し、またこれによって日本の固有信仰を尋ねることを昔話研究の眼目とした。柳田が昔話研究を本格的に開始するにあたって、西欧のメルヒエン研究から影響を受けていることは間違いないが、では、柳田は当時の西欧におけるメルヒエン研究をどのように考え、そして柳田の昔話観を西欧の研究者たちのそれと比較した時、柳田の昔話観はどこに位置付けられるだろうか。

四 メルヒエンの起源に関するヨーロッパの研究動向

柳田文庫にはないが、柳田が参照し、影響を受けたと思われるドイツ語文献が関敬吾の以下の証言から明らかになっている。

アールネは早くから日本の研究者のあいだにも興味をもたれた。そうした関係もあって、柳田国男先生と全国昔話記録を編集した際に、その姉妹篇として海外の昔話の理論的研究

を刊行することにした。ドイツのフォン・デア・ライエンの『昔話論』¹²、フランスのユエの『民間説話論』¹³とともにこの一冊もそのなかにあった。¹⁴

右に挙げたライエン、ユエ、および「この一冊」にあたるアンティ・アールネの『昔話の比較研究』の三冊とBP第五巻には、メルヒエンの起源についてのグリム兄弟の見解や、十九世紀初頭から二十世紀前半までのメルヒエンの成立や伝播に関する諸理論、およびフィンランド学派などの比較研究方法が紹介されている。BPのこれら諸理論が紹介されている箇所には書き込みや付箋は見られないが、柳田の昔話観が構築される過程で重要な情報源になりうる。そこで次にこれらの研究を具体的に見ていくことにする。

グリム兄弟は、異なる国や地域で類似のメルヒエンや伝説が存在する理由として二つの仮説、すなわち、インド・ヨーロッパ説と神話断片理論を立てた。ヴィルヘルム・グリムは一八五六年版KHM注釈で、「あらゆるメルヒエンに共通しているのは、太古の時代にまで遡る信仰の名残りである。ここでは、超自然的な事物が比喩的に解釈された形であらわれている」と述べ、神話的な関心および詩的な関心をもってメルヒエンを捉えていった。言語やメルヒエンによるドイツ人の統一を望んでいたグリム兄弟は、メルヒエンを民族分離以前の共通の原郷土時代にまで遡るゲルマン民族の原所有だと考えた。¹⁶ また、ヴィ

ルヘルムは、メルヒエンは独立に発生し得る、つまり多元的に発生する可能性がある」と次のように指摘している。

しかしながら、おのずと意思つかれる思想があるように、非常に単純で自然である故にそれらの出来事は至る所で繰り返されるといふ状況がある。それ故に、様々な国々で同一のあるいは非常に似たメルヒエンが互い独立して生じたのである。¹⁷

ヴィルヘルムは「メルヒエンがある民族から別の民族へと移動、その異国の地でしつかりと根を下ろすという可能性」を否定はしなかったが、これを例外とした。¹⁸ メルヒエンの源泉を神話に見出したグリム兄弟は、例えば、KHM五〇「いばら姫」を古代北欧神話のブリュンヒルデと、KHM八九「ガチヨウ番の娘」およびKHM一三五「白い花嫁と黒い花嫁」をベルタの神話や昼と夜の神話と同一視した。¹⁹

神話とメルヒエンの関係を土台にした研究グループは後に神話学派と呼ばれるようになる。中でも、マックス・ミュラー [Max Müller] やアーダルベルト・クーン [Adelbert Kuhn]、F・L・シユヴァルツ [Friedrich Ludwig Schwartz] 等、自然神話学派と呼ばれる研究者たちはメルヒエンをインド・ゲルマン期における自然、天候、季節など自然現象についてのシンボルの遺産とみなした。

ヴァイルヘルム・マンハルト [Wilhelm Mannhardt] はグリム兄弟と同様、伝説やメルヒェン、民間伝承の中に神話の名残りを求め、文献学的方法とタイラーなど人類学派の作品に注意を向けた。マンハルトの『畑と森の祭祀』はこれらの影響を受けているのだが、この著作で彼は、ギリシア神話のペレウスの物語をジークフリート伝説およびKH M六〇「二人兄弟」やKH M八五「黄金の子ども」と結び付けている。²⁰異なる場所で類似の神話やメルヒェンが存在する原因については、「似たような状況下の、まったく同じ心理的な兆しから類似の発展」が見られると、多元発生説を唱えた。なお、柳田國男に大きな影響を与えたとされるフレイザーの『金枝篇』はマンハルトの作品を原型としている。

これら神話学派の多元発生説に対立したのが、インド文献史家、言語学者であるテオドル・ベンファイ [Theodor Benfey] である。彼は、メルヒェンは一元的に発生し、伝播するものであるという立場の下、一八五九年、彼が編集した『パンチャタントラ』の序文で大半のメルヒェンはインドが起源で、原初的には仏教説話であったというインド起源説を提唱した。ベンファイの追従者としてエマヌエル・コスカンやラインホルト・ケラーが挙げられるが、インド起源説は後にラングおよびベテイエによる批判に晒される。

これに対して、エドワード・タイラー [Edward Tylor] やラング等はグリム兄弟の多元発生説を進め、昔話の世界的一致の

理由を人類の初期段階における心性の類似性にみて、メルヒェンは多元的に独立して発生するという人類学的理論を唱えた。メルヒェンの中にカニバリズムと魔術の痕跡を指摘したラングやメルヒェンを季節儀礼やイニシエーション儀礼、他の原初の慣習と関連させたサンティーヴ [Pierre Saintyves] やポイケルト [Peuckert] 等が人類学理論の代表者として挙げられる。

さて、柳田文庫にはインド起源説論者を除く、右に挙げた大半のメルヒェン研究者たちの著作が収められている。マンハルトやヴント、ベテイエの著作にも多くの書き込みが見られ、さらに柳田文庫所蔵の雑誌『民俗学学会誌』Zeitschrift des Vereins für Volkskunde の第六卷（一八五六年）から第三十二卷（一九二二年）にはメルヒェン研究の論考の箇所にも多くの付箋紙が挟まれており、柳田は当時の西欧のメルヒェン研究に精通していたと思われる。柳田はこれらヨーロッパのメルヒェン研究に対してどのような見解を持っていたのだろうか。

五 柳田國男の昔話観

昔話の起源について柳田は次のように述べている。

昔話が太古の世の民族を集結させていた、神話というもののひこばえであることは、大体もう疑いはないようであります。したがってもし方法をつくすならば、この中からでも一

国の固有信仰、われわれの遠祖の自然観や生活理想を、尋ね寄ることは可能でありまして、これを昔話研究の究極の目途とするのは、決して無理な望みとは申されません。⁽²¹⁾

柳田はグリム兄弟やマンハルト等、神話学派と同様、昔話の起源は神話にあるとし、神話の名残りである昔話から日本の固有信仰や自然観を探り、これを昔話研究の目的とした。「…その三つ〔神話、伝説、昔話〕の中でも神話だけは数も少なく出現の機会も稀であり、又非常に荒れすさみかつ不純になってはいるが、とにかくこれから伝説と民間説話〔昔話〕へ、移り動いていった足取りだけは見られ」、そして、神話の全体を知るには、「昔話と伝説との、永い間の進化の経路を明らかにする必要があるのである」と伝説と昔話の起源を神話に柳田は求め、神話を復元するためには昔話と伝説の成長過程を明らかにする必要があると説いている。『桃太郎の誕生』で柳田は、「小さ子」のモチーフを中心に、「桃太郎」や「一寸法師」と三輪山の神話、小男神神話を比較し、昔話を日本の神話に遡及させようとする試みている。また、「海神少童」では、「民間説話〔昔話〕の信仰的背景には、往々にして各民族ごとに独立したものがあつた」と言明し、「小さ子」と水神信仰は日本の国民的特徴だと結論している。このように昔話から神話を復元させようとする柳田の研究はグリムを初めとする神話学派の流れを汲むものである。

柳田は昔話の成長発達、起源を突き止める際に、いくつかの

類話の比較を行い、モチーフの異同を調べた。この方法は、柳田が海外の理論的研究の一つとして紹介しようとしたアールネを代表とするフィンランド学派から示唆を得ているように思われるが、柳田の方法論でフィンランド学派と決定的に異なる点がある。それは、フィンランド学派はある一つの話型に限定し、その話型に属することができるだけ多くの類話を比較検討することでその話型の原型を導き出すとするのに対し、柳田は一つの話型に限らず、周辺の話型をも比較の対象にしていることである。例えば、「桃太郎の誕生」では、「小さ子」をキーワードに「桃太郎」の原型を探究するために「瓜子姫」や「一寸法師」が引き合いに出されている。さらには、昔話を伝説と比較することもあった。比較の対象を一つの話型に限らなかつたこと、昔話の中だけに限らなかつたことは、昔話、伝説、神話を一つの大きな流れの中で捉えようとする柳田の視野の広さを窺わせる。

さて、柳田はある種の昔話が国際的な一致を示していることに対して次のように述べている。

これをただ二つの民族の接触と交通さえあれば、自然にそうならずにはおらぬもののように、勝手にきめ込んでいる気楽さに至っては、これを各個の民族に独立に発生したものだ、それが偶然に互いによく似ているだけだと思つてすまして、無責任にも劣らない。…以前の限られた知識でならば、昔話の源頭は印度であり、それから東西に流れ下つたなどとい

ふ類の説もお成り立つだろうが、そういう水筋とは縁も無さそうな、遠い島辺にも同じ実例のあることがわかり…印度の方から、支那を経て入って来たろうということは、ただ何も知らぬ者がそう推測するだけで、そんな形跡はまだ我々には見出し得ないのである。²⁵⁾

右の引用文からわかるように、柳田は多元発生説に対して一元発生説に対しても慎重な態度を示しており、印度起源説に対しては批判を加えている。しかし、柳田は昔話のある土地からある土地への伝播の可能性を否定しているわけではない。柳田は「説話にはとにかくその成熟期と名づくべきものがあつて、個々の風土環境と社会生活の段階により、ないしは説話そのものの各自性質から、国ごとに違つた年齢をもち、違つた経歴をもち、したがつてその伝播様式にも、幾通りかの差異がありえたのである」²⁶⁾と述べており、全国の昔話や伝説には中国やインド、ギリシアなどから伝播したものもあるという可能性を説いている。それらが昔話や伝説として各地に定着する前提条件として、柳田は、「接穂の台木」、すなわち新しく運ばれてきたものと通じ合う何かを受け入れ側にあることを指摘し、その「台木」は具体的には氏神信仰であると柳田は考えていたと、川田稔氏は指摘している。²⁷⁾

また、昔話の年代に関して言えば、ラングやヴント、パンツァーやナウマンはメルヒェンを神話や伝説よりも古いものと

し、ヴェツセルスキーやジュネツプはメルヒェンを神話の子とし、ライエンやド・フリース、プロツプは神話とメルヒェンは共存できたと考えた。この点に関して柳田は次のように述べ、神話と昔話は共存できたとライエンやド・フリースの説と同じ説を唱えた。

耶蘇教国の人々だけは、従来文化は平押しに、新しいものが進み古いものが退いたと解していた故に、説話時代の神話を認めることが出来ず、ましてや神話時代にも既にあつた民間説話「昔話」などは、これを想像して見ることも出来なかつた。²⁸⁾

すでに川田氏や三浦佑之氏が指摘しているが、柳田の神話の概念は一般的な神話とは違つた。²⁹⁾本稿では、ヨーロッパにおける神話の概念と柳田のそれについて詳しく論じることは出来ないが、ここでは、「音声によつて語られる神話」が柳田のいう神話であることのみ触れておく。

六 おわりに

以上、柳田文庫所蔵のボルテ／ポリファカ編『グリム兄弟の子どもと家庭のメルヒェン集注釈』の書き込み調査を行い、昔話の概念を規定する際の柳田への影響を指摘した。さらに、BPやライエン、ユエ、アールネの著作に見られる一九世紀初頭か

ら二十世紀前半までのヨーロッパの昔話研究を概観し、柳田をその中に位置づけようと試みた。考察の結果、グリムやマンハルト等の神話学派の流れを汲んでいること、フィンランド学派の方法論を参考にしながら、昔話研究を昔話だけの枠組みで捉えようとはせず、神話や伝説といったジャンルに目を向けながら昔話を神話に遡及させようとしたことが明らかとなった。

昔話の中に神話の名残りを見えるというグリムの説に追従しながら、他方で柳田は昔話の多元的発生説および一元的発生説には慎重な態度をとっている。ある土地からある土地へ昔話や伝説が伝播することを否定せず、他の土地から伝播した昔話や伝説が定着するのは、「台木」すなわち氏神信仰が素地としてあるからだと考えた柳田は、メルヒエンの伝播を例外と考えたグリムとはこの点で異なる。柳田は昔話を神話へと遡及させようとしたが、その神話そのものの概念が問題となってくる。グリム兄弟やマンハルトら神話学派の神話の概念と柳田の神話の概念を明らかにすることが今後の課題となる。

注

(1) 『定本柳田國男集』第二十五卷 一九八三 筑摩書房(『郷土生活の研究法』)、『郷土生活の研究法』は昭和十年八月、刀江書院より刊行。昭和六年八月、伊勢神宮皇学館に於ける「郷土史研究の方法」の速記に加筆したもの。引用文にある昨年とは、すなわちボルテ／ポリフカの『子どもと

家庭のメルヒエן集注釈』第四巻が刊行された昭和五年(一九三〇年)を指す。なお、引用箇所の意味内容を明確にするために、「」で補足を加えた。

(2) 高木昌史編『柳田國男とヨーロッパ―口承文芸の東西』二〇〇六 三交社。

(3) 高木昌史「柳田國男とグリム学―『遠野物語』の位置―『現代思想 柳田國男「遠野物語」以前／以後』二〇一一。岩本由輝氏は引用文の「第二版第三巻」をKHM第二版(二八一―九九年版)三巻とみなしている(岩本由輝「補訂・柳田國男の紀行文芸をめぐって―『グリムの昔話』における書き換えの問題を含めて―(下)」『柳田國男「遠野物語」作品論集成(3)』石内徹編 一九九六 一九一頁 大空社)。しかし、文脈からして、「第二版三巻」は高木氏が指摘している通り、B P第一巻から第三巻を指していると考えられる。なお、柳田文庫に所蔵されている原文のKHMはレクラム文庫版(第七版)である。

(4) 拙稿「柳田國男による『グリム童話集』の読書過程―柳田文庫所蔵KHM(第七版)の書き込み調査―」『成城文藝』一三二 二〇一五 一―二二頁。

(5) B P第四巻および第五巻の目次・内容については、注(2) 六四―六五頁参照。

(6) 注(4)を参照。

(7) 『定本柳田國男集』第六巻 一九八二 筑摩書房。

- (8) 注(7)四七頁。
- (9) 注(7)五二頁。
- (10) 柳田文庫所蔵のA-Tはトンプソンによる増補、英訳版の以下の三冊。Thompson, Stith: The Types of the Folktale. A classification and bibliography. Verzeichnis der Märchentypen (FF Communications Nr.3), translated and enlarged. FF Communications Nr.74. Helsinki 1928. および Thompson, Stith: The Types of the Folktale. A Classification and Bibliography. Antti Arne's Verzeichnis der Märchentypen (FF Communications Nr.3) translated and enlarged. Second Revision. FF Communications Nr.184. Helsinki 1961.
- (11) アールネやハーンの昔話の分類法に関する柳田の発言は以下を参照。注(7)一二二―一二七頁。『柳田國男全集』第二九卷「昔話の分類に就て」二〇〇―二一六―二二七頁(関敬吾による口述筆記)。
- (12) Friedlich von der Leyen: Das Märchen, Ein Versuch. Heidelberg. (初版一九一七、第二版一九一七、第三版一九二五、第4版一九五八)
- (13) ジュテオン・ユエ『民間説話論』関敬吾監修 石川登志夫 訳 一九八一 同朋舎出版。
- (14) アンティ・アールネ『昔話の比較研究』関敬吾訳 一九六九 一一九頁 岩崎美術社。
- (15) Grimm, Jacob und Wilhelm.: Anmerkungen zu den Kinder- und Hausmärchen der Brüder Grimm. Neu bearb. von Johannes Bolte und Georg Polivka. Bd.5. Leipzig 1932, S. 244.
- (16) Ebd., S. 246.
- (17) Ebd., S. 239.
- (18) Ebd., S. 240.
- (19) メルヒオンの中に見られる神話のモチーフについては以下を参照。Grimm, Jacob: Gedanken über Mythos, Epos und Geschichte. Mit altdutschen Beispielen. In: Kleinere Schriften, Bd.4. Berlin 1869, S.74-85. Grimm, Wilhelm: Über das Wesen der Märchen. In: Kleinere Schriften, Bd.1. Berlin 1881, S. 339-355. (ヴェイルケルの著作の邦訳は以下を参照。『グリム兄弟メルヘン論集』高木昌史／高木万里子編訳 二〇〇八 二九―四五頁 法政大学出版局。)
- (20) Mannhardt, Wilhelm: Wald- und Feldkulte, Bd. 2. Darmstadt 1963 S.52-54.
- (21) 注(7)一五四頁。また、以下も参照。『定本柳田國男集』第八卷 一九八〇 一五頁 筑摩書房。
- (22) 『定本柳田國男集』第八卷 一九八〇 一一頁 筑摩書房。
- (23) 注(7)三五二頁。
- (24) フィンランド学派の研究方法については注(14)を参照。

(25) 注(7) 三三八―三三九頁。

(26) 注(22) 一〇頁。

(27) 川田稔『柳田國男―固有信仰の世界』一九九二 二九二頁 未來社。

(28) 注(22) 一一頁。

(29) 三浦佑之「昔話と神話―古代の民間伝承」『国文学』四四(一四) 一九九九 三六―四〇頁。

参考文献

アールネ、アンティ『昔話の比較研究』関敬吾訳 一九六九

岩崎美術社

ユエ、ジュデオン『民間説話論』関敬吾監修 石川登志夫訳

一九八一 同朋舎出版

ライエン、フリードリヒ『メルヘン(昔話)』山室静訳

一九八三 岩崎美術社

岩本由輝「補訂・柳田國男の紀行文芸をめぐって―『グリムの昔話』における書き換えの問題を含めて―(下)」『柳田國男「遠

野物語」作品論集成(3)』石内徹編 一九九六 大空社

川田稔『柳田國男―固有信仰の世界』一九九二 未來社

高木昌史編『柳田國男とヨーロッパ―口承文芸の東西』

二〇〇六 三交社

高木昌史／高木万里子編訳『グリム兄弟メルヘン論集』

二〇〇八 法政大学出版局。)

高木昌史「柳田國男とグリム学―『遠野物語』の位置」『現代

思想 柳田國男「遠野物語」以前／以後』二〇一二

三浦佑之「昔話と神話―古代の民間伝承」『国文学』四四(一四) 一九九九

柳田國男『定本柳田國男集』第六卷 一九八二 筑摩書房

柳田國男『定本柳田國男集』第八卷 一九八〇 筑摩書房

柳田國男『定本柳田國男集』第二十五卷 一九八三 筑摩書房

Friedrich von der Leyen. Das Märchen, Ein Versuch. 4., erneuerte Auflage, Heidelberg, 1958.

Grimm, Jacob: Gedanken über Mythos, Epos und Geschichte.

Mit alddeutschen Beispielen. In: Kleinere Schriften, Bd.4.

Berlin 1869.

Grimm, Wilhelm: Über das Wesen der Märchen. In: Kleinere

Schriften, Bd. 1. Berlin 1881.

Grimm, Jacob und Wilhelm. Anmerkungen zu den Kinder- und

Hausmärchen der Brüder Grimm. Neu bearb. von Johannes

Bolte und Georg Polivka. Bd.1-5. Leipzig, Dieterich'sche, 1913-1932.

Manhardt, Wilhelm: Wald- und Feldkulte, Bd. 2. Darmstadt

1963

Pöge-Adler, Kathrin: Märchenforschung. Theorien, Methoden,

Interpretationen. 2., überarbeitete Auflage, Tübingen 2011.

(トウリヤキ・ゆか／成城大学非常勤講師)